

イギリス 観光旅行 長尾高弘

目次

飛行機	4
都会	6
馬車	8
中華街	10
正確な時計	16
電話番号	18
抱擁	20
出迎え	22
坂道	26
田舎道	28
青空	30
黒バイク	32
川の上の街	36
紅茶	40
石鹸と水	42

エスカレーター	44
ミイラ	46
ビデオ	48
猫たち	50
訪問	56
スパゲティ	60
ドアマン氏	62
免税店	66
猫かぶり	68
あとがき	71
帯文（鈴木志郎康）	72

飛行機

一二時に離陸してから一六時に着くまでの一二時間

夏の午後が延々と続く

下を覗き込むとシベリアの森と蛇行する川

湖だと思っていたところは雲の影だとわかった

それがわかってからもう何時間もたった

シベリアの森と蛇行する川の風景は変わらない

地図を見てもどこを飛んでいるのかわからない

あのなかにこの飛行機を見上げている人は

いるのだろうか？

視線を上げて真横を見れば

飛行機雲が二、三本

ウラル山脈近辺と思われるところで

地面は雲に包まれて見えなくなつた

次に地面が見えたときには家が見えた

地図を見るとエストニアらしい

四年前のソ連軍侵攻のTVニュースの画面を思い出した

それからすぐに海を隔てて見えた地面はスウェーデンらしい

その先の細かい島々はデンマーク

反対側の陸地はドイツ

そこから切れ目なく続くオランダの運河

一、二時間の間にヨーロッパの様々な国が現れては消えた

このなかで何度も何度も戦争が行われたわけだ

やがてオランダの地面も消えて海一色になる

ナチスの爆撃機の航跡をたどって

ブリテン島が見えてくる

都会

初めて見たロンドン

は
思っていたより都会じゃないような気がした

しかしそれならどんな都会を期待していたのだろうか？

摩天楼

人々の冷たい視線

威圧感？

田舎者というコンプレックスに萎縮して

街の隅でいじけていたかったのだろうか？

ロンドンは赤い街だった

あまり高くないレンガ造りの建物が

あまり広くない道の両側に続いていた

そして驚くほど多くの民族の人間が

歩いて
いた

馬車

イギリスに着いて初めての朝

眠いような眠くないような頭の向こう側で

ばかばかばかばかこという音がした

部屋のカーテンを少しめくって通りを覗くと

自動車に混ざって馬車が歩いていた

ナオキ、馬車だよ、馬が歩いているよ

と叫んだが

ナオキが来たときには

窓の右端から消えてしまっていた

ナオキは外を覗きながら

うまは？ うまは？

と繰り返していたが

馬車は二度と通らなかつた

中華街

Sohoの中華街は

横浜の中華街よりも

香港に似ているような気がした

しかし香港よりも

ロンドンに似ているような気もした

道の両側

どの建物もレストランだったので

どこで食べたらいいのか迷った

外から値段がわかる

少しこぎれいな店にえいやっと入った

客はほかにいない

ナオキの好きなラーメンと

ママが好きな焼きソバ

パパが好きなワンタンメンを頼んだ

飲み物はと聞かれて

結構と答えた

同じ東洋人の顔つきだが

英語で話した

厨房に戻ってオーダーを告げると

若い彼女は不機嫌になった

こちらの方をちらちらと見ながら

訴えるような目で厨房のなかの男に大声でまくしたてている

聞いている方は

メガネの向こうで笑いながら

まあまあとなだめるような顔をしている

もちろん、何を話しているかはわからない

あれ、何かまずいことでもしたっけ？

飲み物を取らないといけなかったんじゃない？

Excuse me. One beer, please!

彼女は大儀そうに腰を上げ

ビールの栓を抜くと

中身が飛び出しそうな勢いで

ドンとテーブルの上に置き

スタスタと戻って

再び訴えるような目で厨房のなかの男にまくしたてている

メガネの奥でニヤニヤ笑いながら彼は料理を作っている

料理ができ上がると

彼女はまたいやそうな顔をして皿を運び

ドンとテーブルの上に置き

スタスタと戻っていった

料理の味は横浜の中華街よりも

香港に似ているような気がした

少々しつこいが

しょぼくれた日本の中華料理よりはうまいと思った

そう思いながら

食べている日本人はしょぼくれて下を向いていた

やっぱりお茶を頼むべきじゃないの？

妻の声に我に返って Excuse me. Tea, please.

彼女の機嫌が少し直ったような気がしたのは

気のせいかな？

お勘定は13ポンドでお釣がきた

お釣は置いてきた

よその店と比べると格安だったね

それにけっこうおいしかったしね

店を出てから満足したというような会話をしつつ

中華街には二度と来なかった

正確な時計

ナオキは日本では八時までぐっすり寝ていたのに
イギリスに来ると毎朝決まって三時に目を覚まし
ママ起きて 起きてようと騒いだ

日本時間に直せば昼前の十一時である

ナオキの時計は

日本とイギリスの両方に

少しずつ正確に合わせていたのだろう

電話番号

教えてもらった電話番号を日本に忘れてきた
勤務先の代表番号だけわかったのでかけてみた
五時をまわっていたので録音メッセージのみ
ここに付けてみると言っているらしい
ところがその電話番号が聞き取れない
テープが一度回ると電話は切れてしまう
またかける
わからない
二、三桁ずつ聞き取るつもりでまたかける
またかける
またかける
またかける

結局同じ電話番号に六回もかけてしまった

やっとわかった電話番号にかけると

当の相手は夏休みをとっていた

ホテルをチェックアウトするとき

請求書に電話の使用料が書かれていた

同じ電話番号が六行並んでいた

抱擁

ホテルのロビーで窓から外を見ていた

下山君の運転するワゴン車が通りを走ってきて

ホテルのエントランスに向かって曲がってくるのが見えた
運転している下山君の顔もはっきり見えた

中から手を振ったが下山君は気付かないようだった

ホテルの前には適当な駐車スペースがなかったため

ワゴン車はホテルの前を少し通り過ぎたところで止まった

下山君が住んでいるからロンドンに来たのに

日本から遠く離れたこの街に下山君がいるというのが

何とも不思議だった

ワゴン車から下山君が下りてくるのと同時に

ホテルから飛び出して走っていった

下山君もすぐに私に気付いたようだった

日本じゃないからこんなことをしても自然な気がするよ

と言って西洋人のように抱き合った

そうは言っただものの

西洋人よりはぎごちない感じがした

それでも

抱き合っている相手は紛れもなく下山君だと実感することができた

出迎え

大谷君は一月にも出張でロンドンに来た

一週間でインド、イギリス、アメリカと回ったのだから

ジャパニーズエンジニアもハードである

神戸に帰ってすぐに地震にあった

家はひっくり返らなかったが

結婚祝いの食器類は全部壊れてしまったそうだ

電話で話しただけだから

どのくらい大変だったのか

それでもなかったのかは

わからない

備蓄していた牛肉で毎日すき焼きを食っている

などと電話では言っていたが

新婚の奥さんはしばらく実家に避難していた

それでも予定通りロンドン行きは決行となった

双方の都合で私たちとは日程が一日ずれた

昨日着いたばかりの Heathrow にト山君の車でお出迎え

飛行機は予定よりも早く到着していた

昨日通った到着ロビーに急ぐ

たった一日の差でも随分前から来ているような錯覚に陥る

クウェートからの便と重なったせいか

出迎えも到着もアラブ系が多い

そう言えばあの辺はイギリスの植民地だったな

昨日もアラブ系の人をたくさん見かけた

次第に日本人も増えてくる

もう出てきちゃったのかな

でも出てきたからってふらふらどっかに行ったりしないよな
などと言っているうちに

二人が小さく見えた

地震のあとは初めてだ

やあと声を交わすとすぐに

彼はタバコがすいたいと言った

おお それならこっちだよ

と物知り顔で喫煙所に導く

二人同時にタバコに火をつける

それから大きくフーッと煙を吐いた

坂道

緩やかに左にカーブを切る上り坂

左側には Windsor Castle の城壁が続き

右側にはアンティークな商店が並んでいた

城壁はそれは立派なもので

そこから先の空間を大きく見せていた

商店街の小さな店の数々は

その小ささによって城をさらに大きく見せていたが

渋い色で統一されており、決して見苦しくはなかった

イギリスでは、街の景観を保つために

建築に対する規制が厳しいのだそう

アンティークな店の一つ一つには

MacDonald や HaagenDazs といった店が含まれていたが

外からはとてもそのような店には見えなかった

もつとも、坂道にはそれらの店の商品の抜け殻が散乱していた

見学の時間は終わっていた

鉄柵から城のなかを覗くと

牢屋に閉じ込められているようだった

花売りのお嬢さんと記念写真

そこから緩やかに右に曲がる下り坂をおりていった

アンティークな MacDonald の横の

アンティークな Pub に入る

暗くて汚くて無愛想だから落ち着く

ぬるいビールで乾杯！

田舎道

ロンドンから西へ時速九〇マイル

一面の草原のところどころに森 家

地平線をさえぎる山はなく

その分遠くは見えない

高速道路なのに牛注意 羊注意の標識

牛はいるけど羊はあまりいない

おかしいなあ、もっと羊がいるはずなんだけど

食われちゃったのかな

イギリス人は羊を二度殺すって言われているんだよ

一度は本当に殺すとき、もう一度は料理するときってね

下山君の話に助手席でへー、なるほどと相槌をうつ

女と子供は時差ぼけで眠っている

大谷君は小さな目をぱっちりあけて

黙って前を見ている

おいおいお前も会話に参加しろよ

片道一車線の道に下りても時速七〇マイル

すれ違う車はあまりなく

交差する道もあまりない

草原とまばらな森 家

八時近くなるとさすがに暗くなってくる

あ、thatched house

イギリス人でも珍しがるという茅葺きの家を

下山君が指さすが

あっという間に見えなくなった

青空

manor house の朝は青空

ニシンとフライドエッグの食事を取ってから

散歩に出かける

盛んに吠えている犬は

檻のなか

狩りにでも使うのだろうか

尖った歯がギラギラ光っている

逃げるように歩いた細い道は

何やらでこぼこしていて

その先の大きな木の下では

二頭の馬が休んでいた

リスはその木を駆け上がっていった

青空の片隅にはヘリコプター

周りにほかの建物は見当たらない

manor house は荘園領主の屋敷だという

税金対策で次々にホテルになっている

庭から正面に回ると

スーツにネクタイの紳士が水をまいていた

Good morning

黒バイク

Cotswolds の田舎道は

どついうわけかバイクが多かった

サラブレッドの騎手のように前のめりで乗るタイプではなく

後ろにそっくりかえるタイプ

男も女もみな黒いレザーのスーツで

五台、十台と群れをなしている

草っ原の真ん中にガソリンスタンドがあった

下山君は

イギリスでは自分で入れるんだよ

と言って車を下りた

走っているときには気付かなかったが

蜂が何匹もぶんぶん飛んでいた

大丈夫かな、悪いなと思いつつ

蜂が恐くて車を下りられない

下山君は蜂など目に入らないような顔で

ガスタンクのキャップを外している

しばらくすると

バイクの一団がやってきた

日本で言う暴走族のようではないが

蜂の親玉のようにぶるんぶるんとうるさい

汗とほこりでどろどろの革のスーツが

ぷんと臭ってきそうである

ますます悪いなと思いつつ

ますます下りる気をなくす

下山君は相変わらず涼しい顔をして

ガソリンを入れている

バイクの一団が爆音を残して去ったあと

下山君の給油も終わってガソリンスタンドを後にした

次に入った街のレストランには

バイクお断りと書いてあった

バイクの客は嫌われているのだろうか？

あの蜂を *wasp* と呼ぶらしいよとは

あとで知った

川の上の街

川の上にある街

Stratford-upon-Avon

川の上にある街という言葉がふっと思いついたのは
この街の名前を覚えたからなのだろう

upon-Avon は River Avon 沿いという意味

ほかの Stratford と区別するための形容詞だ

土地の人は形容詞抜きで Stratford と呼ぶ

もちろん この街は

一五六四年四月二三日に William が生まれ

一六一六年四月二三日に William が死んだ街

有名な観光スポットである

私たちも

まだ残されている四〇〇年前の生家を外から見て

（街全体が落ち着いた雰囲気に保たれているが

さすがにその家は回りの家よりも色が古い）

ぞろぞろと人の流れに従って歩き

彼が死んだ家 New Place を外から眺めた

そこから Royal Shakespeare Theatre に抜ける道は急に人通りが少なくなり

明るい道も劇場の陰に入ってしまう

しかしそれも束の間で

劇場の横を抜けると突然視界がぱっと広がる

芝生の広場に座った人々

木の下で大道芸を見ている人々

芸人のよく通る声とどつと噴き出す笑い声

その先には日の光に輝く River Avon

レストランや売店になっている舟が並んで停泊していて

狭い川の向こう側にはまた同じように低い町並みが続く

ああ なんてゆったりとした日曜日

Stratford-upon-Avon は

川を抱いている街だった

紅茶

ホテルの朝食で紅茶を飲んだ

ボーイ氏がティーポットをテーブルに置いた途端

紅茶の香りがぱーっと広がった

さすがに本場は違うわいと感心した

毎朝毎朝感心しながらうまいうまいと飲んで

数日後、下山君に教わったスーパーマーケットに行った

紅茶は有名店で買うよりもその方がおいしいのだという

いつもより日本人比率の低い店内をうろろ歩きまわり

やっと見つけた紅茶売場には、ティーバッグしかなかった

隣のコーヒー売り場には何種類も豆が置いてあるのに

その翌朝、朝食のティーポットのふたを開けてみた
予想通り

下山君にその話をしたら

香りの違いはティーバッグかどうかではなく

水で決まるという

カルシウムの多い硬水が紅茶には合うのだそうなの

日本に帰ってから早速そういう水を買って試してみた

おいしい

よつな気がする

石鹸と水

ホテルの石鹸をつかってシャワーを浴びた

とんと泡の出ない石鹸で洗った気がしなかった

そのくせ湯をかけると妙にぬるぬるして

洗い流せたような気がしない

なのにタオルで身体を拭くと

ぬるぬるはきれいに取れるのだ

なんてひどい石鹸なのだろう

次の夜に別のホテルに泊まって別の石鹸を使った

やはり同じようにぬるぬるする

そのときにはイギリスの水がカルシウムの多い硬水だ

ということを学習していたので

どうやらこれは水のせいらしいぞと思った

翌日はまた元のホテルに戻って前日のホテルの石鹸を使った

ぬるぬるは少しでした

石鹸にも問題はあったらしい

エスカレーター

地下鉄のエスカレーターは長かった

地下鉄に乗っている時間よりも長かった

片側を開けておかないと

後ろから来て舌打ちするやつがいた

広告のポスターが等間隔に並んでいた

すべての妊娠が喜ばれるわけではない

中絶手術のご相談は何某へ

ポスターにはガムがへばりついていた

改札の前に pickpockets に注意と書いた紙が貼ってあった

地上に出るとたいてい道に迷った

ミイラ

ミイラはガラスの二段ベッドで

仰向けに寝ていた

ぐるぐる巻きの布の上に

目や口が書き込まれているものもあった

ミイラというよりも

死体といった方が正確な感じがした

二段ベッドはいくつもあって

その間を生きている人間がうようよしていた

この一角は明らかにほかのコーナーよりも人気があった

British Museum は年中無休入場無料で

写真、ビデオは撮り放題

私たちも死体の前でニッコリ笑って

記念写真を撮った

ビデオ

Buckingham の有名な衛兵は柵のずっと向こうにじっと立っていた

あんなに小さいんじゃないや蠟人形が置いてあってもわからない

その手前の柵の少し向こうでは裸の上半身に tattoo のお兄ちゃんがPAを運んでいた
柵のこちら側にぞろぞろ並んでいる観光客の視線が気になるらしく
ときどきこっちを見てはふふんという顔をした

観光客の後ろの円形広場では仮設の舞台を作っていた

あれまあ何をやるのかねえ、ロックコンサートでもするのかしらん

ダイアナ妃はそういうのが好きなんだよね

などと言いながら観客席の横の説明を見ると

八月一九、二〇日ミデー式典と書いてあった

意味を理解するまでに三〇秒かった

後から考えるとずいぶん長い三〇秒だった

日本人は盆休みに海外旅行をするが

盆休みには八月一五日が含まれているのである

猫たち

軽い夕飯を手早くすませ

急いで着替える

ナオキはパジャマに

父と母はよそ行きに

さすがに変だと思って

パパとママはどこ行くの？

ナオキも行きたい

と言われたときには

ベビーシッターを呼んで

ミュージカルなどに行こうとしたことを後悔した

ほどなくベビーシッター到着

きれいなお姉さんだったのでナオキはすっかり気に入る

親なんかどうでもよくなってしまった

お姉さんの言ってるらしいの聲に送られて

ホテルを出る

日本でも盛んに宣伝されていたCatsが

T.S.Blotの詩集を脚色したものだとは

うかつにもロンドンに来るまで知らなかった

北村太郎の名訳

「いいかい、猫にゃー三つの名前がぜったい必要なんだよ、
どんなやつでもね」

はよく覚えているし

挿し絵入りの原著も持っている 持っているだけだけどさ

地下鉄をHolbornで下り

New London Theatre に向かって歩き始めたときには

もうナオキを置いてきたことを忘れていた

だって よそ行きを着ているんだもんな

彼女も母の顔から女の顔になっている

同じように劇場に向かう人々と車

パブの呼び込みの声もにぎやかで

こんな気分は久しぶりだなと思う

芝居は舞台がいきなりぐるりと回って始まった

ロックとクラシックをちゃんぽんにしたような音

客席に向かって猫が走ってくる

でも二階の我々の席にははるかに及ばない

その猫たちがさっと消えると舞台の上の方から

伊達猫登場 よく動く腰だ

ひとしきり歌うと別の何とか猫が登場

また歌が続いて…

それにしても結構長い

セリフもわからないし退屈してきたところで

主役猫のめーもりーという歌が始まった

さすがにそれはすばらしく

眠気が吹っ飛ぶ

その歌が終わったところで休憩

後半が始まって

結構長くて

退屈してきたところで

まためーもりー

主役猫は階段を上って天国に行ってしまった

詩集ではきつと天国に行ったりはしないんだろっなあ

と思いつつ終わる

日頃の母の疲れがたまっている彼女は

途中で寝てしまったが

めーもりーで起きて

眠かったけど感動した

とのたまわった

オレは寝なかつたぞ

芝居がはねたあと糸の切れた凧となって

Sonoのインド料理屋に紛れ込んだりしていたので

ホテルに帰ってきたときには日付が変わる寸前だった

ナオキは一時間ほどで寝たそうだ

ホテルの外でタクシーを捕まえ

ベビーシッターを見送る

部屋に戻ると彼女が母に戻ってナオキの布団を直していた

枕元にはお姉さんが描いた車の絵があつた
私が描いたものよりうまかつた

訪問

有名なロンドンの二階建てバスに初めて乗ったのは

イギリスで過ごした最後の夕方だった

仕事帰りで満員のバスは北に向かって走る

最初は増える一方だった客が

逆に減る一方になると

周囲の建物の高さも下がってくる

そんな街並みのなかに日本語の看板などもあって

(漢字だけではなくカナも入っている)

あれがRAに爆破された日本料理店

と下山君が指さした店のなかは

がらんどうだった

終点は地下鉄の Golders Green 駅

郊外に來ると地下鉄も高架になつていて

遠くからもよく見える

この辺はユダヤ人と日本人が多いから

「街なんて言われているのさ

下山君はそう言いながら

駅から自宅までの道を案内してくれた

歩きの距離は思ったより短く

下山君はこことレンガ作りの semi-detached を指さした

煙突が立っていて

まるでイギリス人が住んでいるような家だ

奥さんが出てきてご挨拶

大谷君や私は初めてではないが

奥さん同士は初対面

さっそくイギリス人が住んでいるような家の前で記念撮影とあいなつた

私たちは休みを取ったの旅行だが

今日は水曜日

下山君はスーツ姿で私たちを案内してくれたのである

さぞかし迷惑だっただろうと思うのだが

下山夫妻の *hostship* はすばらしいもので

ほどよいタイミングでおいしい料理においしい酒

話はおもしろくて観光やショッピングの情報も満載

(奥さんが厨房から出てきたときには下山君が料理を取り分けたりして)

退屈させず気を使わず

最後はおいしい紅茶に手作りスコーン

さすがにイギリス仕込みは違うと感心した

なのに東洋の野蛮人が

学生時代のあることないこと一人でぶちまけて

ガハハハなどと下品に笑っているうちに

夜は更けていつてしまった

ごめんなさい

反省してます

スパゲティ

一週間で三回もスパゲティの店に入った

一軒目はSoloの小さな店

歩き回って疲れ果てた末の夕食だった

パスタが茹で過ぎてボロボロだったが

ソースの味がまずまずだったので満足できた

二軒目はCovent GardenのThe Marketの横

移動式の小さな観覧車やぐるぐる回る汽車が見える

最初の店よりも茹で加減は少しましで

ソースの味も少し上だった

三軒目は Regents Street から少し入ったところ

日当たりがよくて店のなかまで明るい

眠っていたナオキの目もぱちつとさめた

麵はアルデンテ！ これはうまいぞ

三軒の二度と行かないだろうスパゲティ屋

行った順番が逆じゃなくてよかった

ドアマン氏

ホテルのドアマン氏は体格のよい初老の紳士だった
私たちがドアを通りかかると

（私たちだけに限ったことではないが）
身体に似合わぬ高い声で

はあろうと声をかけてきた

それから腰をかがめてナオキに声をかけた

ナオキには英語はわからないが

日本語もよくわからないので

日本語しかわからない私たちよりも

ドアマン氏の英語がよくわかったのかもしれない

ドアマン氏とナオキは仲良しになった

日本に帰るといっ日にドアマン氏に話しかけてみた

うちの boy といっしょに写真を撮らせてもらえませんか？

Sure!

記念撮影が終わると今度は彼が話しかけてきた

うちでタクシーを呼んだら空港まで二〇ポンドで行けるよ

来るときのタクシーは四〇ポンド近くかかった

それは安いということで

じゃあお願いしますと言うと

彼はコンシェルジュに話をしに行った

してみるとタクシーを呼ぶのは彼の仕事ではなかったわけだ

タクシーが着くと

彼は妙に重い私たちのボストンバッグを運んでくれた

ナオキと仲良くしてくれた若いポーターのお兄さんもいっしょだった

ナオキはムニユムニユマン、ムニユムニユマン

とわけの分からない言葉を連発してご機嫌だった

ガイドブックには荷物一個につき一ポンドが相場だと書いてあった

Thank you! Bye Bye!の握手のときにその一ポンドを渡した

ドアマン氏は丸い硬貨をポケットにしまうと

もう一度本当の握手だと手を差し出した

二度目の握手は一度目の握手よりももちろん感動的だった

それから

タクシーのドアが閉まりドアのこちらとあちらで手を振った

タクシーが動き出した

ポーターのお兄さんが Munny-munny-man Bye! Bye!と叫んで

ホテルは見えなくなった

免税店

Heathrow の免税店では Shakespeare 全集を売っていた

A 4 サイズのでかい本の表紙はまるまる William の肖像画で

そんなものを平積みしておけば目立つのである

値段はわずか九ポンド九九ペンス

一五〇〇円ほどだからお買い得だ

しかも今お買い上げのお客様には

「イギリスの王様」という本がおまけでつく

Shakespeare 全集を買わなければ

その本だつて一ポンド少々するのである

買わない手はないではないか

さっそく二冊を手にとってレジの前に並んだ

飛行機が出るまで「イギリスの王様」のページを

ばらばらとめくった 歴代の王の生年と没年

殺した殺されたの話に系図の山

今は本の山に埋もれてどこにあるかわからない

一ページに二〇〇行のテキストが詰め込まれている Shakespeare 全集は

まだ一ページも読んでいない

猫かぶり

二月一九日の夕刊一面中央に

「ロンドン、また爆破テロ」

という記事が載った

「IRA犯行か」*

半年前には北アイルランド問題は

過去の問題だと思っていた

下山君がバスのなかから

あれがIRAに爆破された日本料理店

と指さしてくれたときも

過去の話として聞いていた

うかつだった

「現場は、王立オペラ劇場や地下鉄コベントガーデン駅に近い目抜き通り」

地図も載っているから間違いない

Covent Garden のマーケットに行くために

Big Bus Company の観光バスを下りた場所だ

角にサンドイッチスタンドがあつて

少し寂しい道を入っていくと

マーケットの横に突き当たる

その通りには

頭からすっぽり紙袋をかぶせられて

後ろ足だけ出してばたばたしている

猫を売っている店があつた

誰も見ていない店先のワゴンの上で

猫は休む間もなくばたばたしていた

だからどうというわけではないが

記事を見て真っ先に思い出したのは

なぜかその猫だった

*IRAが爆弾をしかけた場合、予告電話を入れるケースが多いが、この事件では事前警告はなかったとこの記事でも書かれており、その後のロンドン警視庁の発表でも誤爆と推測していたので、念のため。私自身は武装解除を話し合いの絶対前提条件としている英国政府の態度は頑なに過ぎるのではないかと思っている。

あとがき

下山君と大谷君は、大学の合気道部の同期生である。九五年八月に、大谷君夫妻とともにロンドン勤務の下山君に会いに行くことになった。バックツアーでこそないが、今どきの日本人にはよくある海外旅行である。帰ってから、ここにまとめたようなものを書いた。なんで行分けしているのだろうと思いつつ、この内容は、この形式でしか書けなかった。

自分でも半信半疑で五月頃からこっそり Internet のホーム・ページに置いておいたところ、鈴木志郎康氏が電子メールで励ましてくださった。そこで、思い切って清水鱗造氏にお願いしてこのような形で出版していただくことになった。鈴木氏には無理を言っただ帯文まで頂戴した。両氏には感謝の言葉もない。このようにささやかな書きものだが、旅行でお世話になった下山君夫妻、大谷君夫妻と我が家族にささげたい。

一九九六年十月五日

長尾高弘

(帯文)

まずは、インターネットの一点にこの詩集を見つけた。ディスプレイの画面上で読むのがもどかしく、プリントして、手製の詩集にして読んだ。日頃は見えない隣人の姿を見ることが出来て、嬉しかった。

この詩集を、作者は「観光旅行」と題しているが、それは自己、家族、国家、歴史などの様々な意識が交錯して、比喩表現を抜けたダイレクトな言葉で、感じやすいひとりの男の姿を、軽く、そして深く、語り出している。これは、インターネットという情報の網目を踏まえた表現の言葉の結晶といえよう。

鈴木志郎康

(紙版奥付) JのPDF版は無料です)

イギリス観光旅行

© Takahiro Nagao 1996

ISBN 4-943953-06-9 C0092 P800E

一九九六年一〇月三〇日発行

定価 八〇〇円

著者 長尾高弘

〒二二四 〇〇三三 神奈川県横浜市都筑区東山田三 二六 一六

電話 〇四五・五九二・六七二七

発行者 清水哲夫

発行所 昧爽社

〒一五一 東京都世田谷区弦巻四 六一八

電話 〇三・三四二八・四一三四

印刷 清水タイプライター社

製本 (有)石川製本所